

Title	針尾島の天囚
Author(s)	町田, 三郎
Citation	懐徳. 1985, 54, p. 40-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90645
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

針尾島の天囚

町田三郎

明治四十年五月十七日、激しく降りつづける雨を冒して西村天囚は大阪を発った。九州の旅もこれで三度目である。たんなる風流の旅に終らせるつもりはない。目的は福岡で亀井南冥・昭陽父子の学問を調査し、日田にその高足広瀬淡窓の事蹟を探ることにあつた。思えば維新の変革以来いまに至る四十年の歲月は、かつて「著名の大儒すら生没梗概の世に知らるるのみにて、其の生平は湮滅伝わらん」状況へと押し流していった。天囚はこれが何とも残念で口惜しく、いまのうちに遺書をも捜し、故老にも尋ねて「化政保弘」の徳川末期の文運盛事のありさまを聞きとり記録に残しておきたかった。いま記録に止めておかなければ、さまざま重要な事実が永久に忘れられ滅び去ってしまう。それが憂えられてならない。

五月十七日大阪発。十八日早朝門司着、久留米へ直行

して二日滞在。二十日に福岡へもどって亀井父子の遺書を捜訪。二十五日は唐津。二十七日は多久をへて武雄。翌二十八日には佐世保郊外の針尾島に楠本碩水を訪問。あしかけ三日滞在。三十日長崎。嬉野温泉・佐賀と抜けて福岡郊外二日市の武蔵温泉泊が六月一日。二日には秋月に原古処の墓を弔い、三日甘木をへて豊後日田。咸宜園の往時を偲びながら淡旭二翁の日記を読む。滞在七日。九日邪馬溪から豊前中津へ。十一日、村上仏山の遺居を訪ねんとして果せず。十二日に下関で旧知と別れ、十三日大阪帰着。つごう二十八日間の九州資料探訪の忙しい旅であつた。この折の紀行文はやがて大阪朝日に六月二十六日から四十二回にわたって「九州巡礼」の名で連載される。

「九州巡礼」の第三十回から第三十七回までの八回は

針尾島の楠本兄弟についての記述で、途中の第三十三回に「前田豊山翁」の一項が挿入される。針尾島の記述の中に突如種子島の豊山翁が入ってくるのも妙な感じだが元来碩水と豊山とが永年文通して相許す仲であり、その縁もあって天囚はこの地を訪ねているわけで、ここに豊山を紹介記述するのも話の順序としてあながち不可はないわけである。

さて、針尾島は佐世保郊外の早岐の瀬戸を東に、西は渦潮で有名な西海橋まで「東南は大村湾、南北は早岐湾佐世保湾に臨んで南北二里余東西一里許り」の風景絶佳の一小島である。ここに幕末から明治にかけて学識・人物ともに高く評価され「西海の二程」として知られた楠本端山・碩水の兄弟がいた。

天囚がこの島を訪ねた明治四十年には、兄の端山はすでに没し、碩水のみ七十六歳で健在であった。碩水のこの年の『日記』にも「新曆五月二十八日、西村時彦来訪」とある。一体針尾島に碩水を訪ねたいと天囚が考えた理由は、自らの師前田豊山と碩水とが相許す仲であったことと、たまたま碩水の弟子岡幸七郎と知り合っており、天囚の労をとってくれる恰好の人物をえたことにある。

明治三十年の暮れ方、天囚は密命を帯びて渡清した。

目的は時の湖広総督で反日派の巨頭でもあった張之洞と会見し訪日の約束をとりつけることであった。その時の模様の一部は「天囚遺書」巻一の「張制軍と時事を論ずるの書」などから知られるが、実は当時漢口にいて会談その他諸事幹旋の労をとったのがほかならぬ岡幸七郎その人であった。

岡幸七郎、号を安節または亨甫は楠本家の姻戚で、兄の直養岡次郎とともにその生涯を端山・碩水の頭影に尽瘁した奇特な人物であった。その岡幸七郎が漢口からたまたま郷里に帰省中であつた。この機会を捉えて天囚も西下するのである。この時岡幸七郎が碩水あてに天囚を紹介した書翰が現存している（九大蔵）。

大阪朝日ノ主筆西村ト申スモノハ、薩南種子島ノ人ニテ前田翁ノ門弟ノ由ニ御座候ガ、一度拝趨大教ヲ請、且ツ御蔵書拜見致度旨申居候間、小子ノ在郷中ニ是非西下スベキ様申過候。都合ニヨリテハ其内罷越スヤモ難図候間、其節ハ同行拜趨可致積リニ御座候……。

こんな次第で五月二十八日、日宇村（現在世保市）の岡家に一泊し、岡幸七郎の案内で「村の西なる松尾川の裾より」小舟に乗って江下の碩水を訪ねる。このときの印象を天囚はこう伝えている。

「楠本碩水翁の居る所を江下と言ふ。故に扁して江下村舎と曰ふ。清国の愈曲園の書する所なり。……客間は八疊と六疊とにして、几案筆硯も亦浄潔を極め、壁間の図書、頗る奇珍多し。聞く翁の藏書万巻、往々異本ありて、清人余元眉の如き、賞鑿措かざりきと。待つ間ほどなく年は七十余と見えて清癯鶴の如く、結髪古風を存したる細面に、真白なる鬚髪の胸に垂れ、眉目の間に一種の温情を湛えたる一老人は、出でて叮嚀に挨拶せらる……。」

「豊山先生とは年久しく文通も致しおれど、お互いに老人の事とて御面会の機は無かるべしと残念に思ひしが、其の御門人なる貴殿に御面会申して、豊山先生にも御目に掛りし心地す……。」

碩水によると豊山との交りの始めはこんないきさつからであつた。「ある年九州を歴遊せる教育幻灯家に逢ひし時、御身遍く九州を巡りて多く人に接したる中に、人物と見えたるは誰なりしと問ひしに、然ればなり、隅州種子島に前田豊山といふ老儒あり。学徳並に高く、九州の人物と覚えたり。」という。時に碩水は如竹散人の事蹟を知りたいと願っていたので、豊山に書を送りこれを質した。これが契機となつての文字の交りである、と。

「翌日も碩水翁を訪ふて、翁が少壯の時に従遊せし先

儒の逸話を聞き、殊に淡窓の平生に就きて多くの好材料を得たり……。」そしてここで得た知識は「他日淡窓伝をものせん時に記すべし」と断っている。一体いかなる先儒に関する物語りが二人の間にとり交わされたのかもとより想像するよりないわけだが、恐らく碩水の「過庭余聞」に記載されている次のようなことどもだつたらうと思われ。

塩谷岩陰ノ文ト淡窓ノ詩トハ鍛鍊ナモノゾ。ソレデ支那人ハスクゾ。日本人ノ詩ハ霸氣ガ多イゾ。殺伐ナ風ガアルゾ。温和ニナイゾ。詩ノ本意ガ乏シイゾ。声響ト言フコトハサツパリナイゾ。

淡窓ハ眼病デソレカラ読書ハヤメタトミエルゾ。読書ハ至ツテ狭イゾ。ソレデモ読ンダ書ハ覚エテ居ルゾ。問ウタレバ、知ツタコトハ直ニ答ヘルゾ。知ラヌコトハ知ラヌト言ウタゾ。聞ハナイゾ。再ビ問ウコトハイラヌゾ。

眼病デナカッタトモ、志ガ小サイユエ、博ク書ヲ読ムコトハセヌ人デアッタラウ。高尚ナ人デハナイゾ。書生ヲ育ツルコトニ汲々トシタモノゾ。渡世ノ為メゾ。

碩水の人物評の透徹していることはつとに知られたものであるが、それは実際に当人がさまざまな局面で多く

の人物と交流しその上で寸鉄の断案を下しているからである。天囚が旅に出て故老から聞きとりたいと念じていたものは、まさにこうしたことでもあった。恐らく天囚は碩水の『過庭余聞』にも収載されないような数々の逸事や裏話をも聞かされたことであろう。そうした記録で手冊は一杯であったろう。

別れぎわを天囚はこう書いている。「明日は出立せんと云ふ日、翁は雨を厭はで、老体を勞して訪づれ清談半日に及び、遂に正脩・正翼の二氏并に亨甫と、燭を翦りて別を叙せられしは、以て翁が諄々人を教へて倦まざるを知るに足れり。針尾島三日の游は、十年の読書にまさりし思こそすれ。」

時に碩水七十六歳、天囚四十三歳。碩水と豊山との關係から考えても、このとき天囚を遇する碩水の胸中には自らの内弟子に接するに似た思いが去来したことであろう。天囚は翌四十一年の正月からこの九州旅行でえた知見をもとに「異彩ある学者」を大阪朝日に連載する。たんなる九州の学者の列伝といったものではなく、学問の内容に立ちいった重厚な労作で、冒頭の亀井父子の学問の紹介など今日の水準からみても秀れたものである。その中でも当時出色の文章と評判をえたのが広瀬淡窓・旭

窓の伝であった。碩水から「十年の読書」にまさる「好材料」をえたお陰であることはいうまでもなかるう。

碩水と天囚とは、その後あい会う機会をもたなかったが文通は続いていた。碩水は時おりの思いを詩に詠じている（寄西村天囚）。

大正五年、天囚念願の懷徳堂の再建は成った。その式典に「近くば御招待を」と天囚は針尾島に書翰を送っている（九六）。碩水こそしんそこ参会して欲しかった一人であったろう。碩水はこの年の暮れ亡くなっている。

人間の生涯の中には何度か転機というべきものが訪れてくる。天囚の場合、東京での青春彷徨から足を洗って大阪に移り住むとき、独自の世界を求めて中年にして中国留学へと旅立つとき、あるいは懷徳堂再建を決意するときなどを考えることができよう。私は天囚の「九州巡礼」及びこのときの碩水との邂逅を、明治三十三年から三十五年にかけて「中年にして書生」となって中国へ旅立った天囚の決意がようやくここへ来てしっかりと実を結び、その後の人生を規定するほどに意味をもつ、重要なものと考えている。つまりこんなふうである。

三十年の頃、天囚は行き詰っていた。朝日の同僚内藤

湖南、池辺三山の学識はまことに巨大であった。自分もふり返って若さと才気にまかせて得意自在であった。しかし真に独自の世界と誇れるものはどこにあるのであろう。そう気づいたとき天囚はなりふり構わず中国への旅に出た。帰国後「清国の現態」「清国の新学と革命党」等を社説に発表する天囚はたしかに一流の時局通として生彩をはなっていた。しかし中国の現状に明るい程度のことでは天囚の渴えた心が満たされることはない。自らの学の根底はどこにあるのか。依然天囚は悩み続ける。この時天囚はなお霧の中であった。

三十八年の「北国物語」を書く頃から天囚の態度は著しく変化する。史実の考証が精密になり客観的な叙述が増し、主題に依じて時間を先後して関係する諸事の考察がとびこんできて内容を幅広くかつ深くする。そしてその主題が歴史的人物、とりわけ幕末期の学者に照準が合ってくるのが、翌三十九年の四国訪問「南国記」の柴野栗山、井上通女からである。この年の秋の「豊後路」における帆足万里また然りである。

一体天囚は中国留学の頃から人が変わったといわれる。豪放な気風から温厚沈着な性格へと一変したというのである。ある者はこの変化を捉えて新聞記者失格だとす

る。厳しいが一つの見方としてありうる。しかし天囚はいまや時事的で今日的な問題を手際よく処理していくことに喜びを感じる以上に、じっくり本腰を入れて物の本質をとことん解明追求することに心を惹かれていた。日本の伝統文化、幕末維新のもつ意味とは何なのかが探りたかった。それを明らかにするためならいかに煩瑣で面倒な考証も嫌うものではない。

こうした天囚の思いが自覚化され、考証もいよいよ精密となり、目標も幕末期の学者に見据えられて旅に出た最初が、まさにこの九州巡遊であった。そしてこの旅で碩水と出会うのである。この出会いで何よりも重要なことは、この時を境にして天囚は従来 of 迷いを振りきって自らの進むべき道を自信をもって歩み出した点にある。碩水に触発されるどころ大であった。自らの事業、行くべき道がはっきりと見えてきたのである。天囚は自信をもった。「異彩ある学者」の筆の伸びは如実にそれを示している。

天囚は自らの鉉脈をついに発見した。あとはたゆまず掘り進めばよい。それは名作「日本宋学史」に辿りつくべき確かな道であった。針尾島における天囚を、私はこう考えている。

(九州大学教授)